

【実践編②】

地域・保護者・子供による 「自立した学び」の共創

～共に未来を切り拓く～



「自立した学び」を子供たちに

瀬戸内の穏やかな海と豊かな自然に囲まれた竹原市吉名町。この町に、小学校1年生から中学校3年生(1～9年生)までが学ぶ義務教育学校・竹原市立吉名学園があります。

本校の学校教育目標は「自立した学び」を子供たちにです。「自立した学び」とは、子供たちが自らの思いや願いを基に目標や計画を立て、様々な困難や失敗と出合ったり、迷ったりしながら、試行錯誤しながら、自ら学びを調整し、課題を解決していく学びです。私たちは、子供たちに学びの主権を返すことで、「自立した学び」を創造したいと考えています。

その学びは、一人では成り立ちません。子供、教職員、地域、保護者が思いや願いをもち寄り、共に問いを育て、学びを創り出していく。吉名学園では、こうした学びの創出の在り方を「共創」と呼んでいます。「過疎」や「少子高齢化」という地域が抱える課題に、子供たちがどのように向き合い、地域や大人を巻き込みながら解決しているのか。教科の枠を越え、9年間を見通したカリキュラムのもとで、子供、地域と共に「自立した学び」を創り続けてきた吉名学園の挑戦を紹介します。

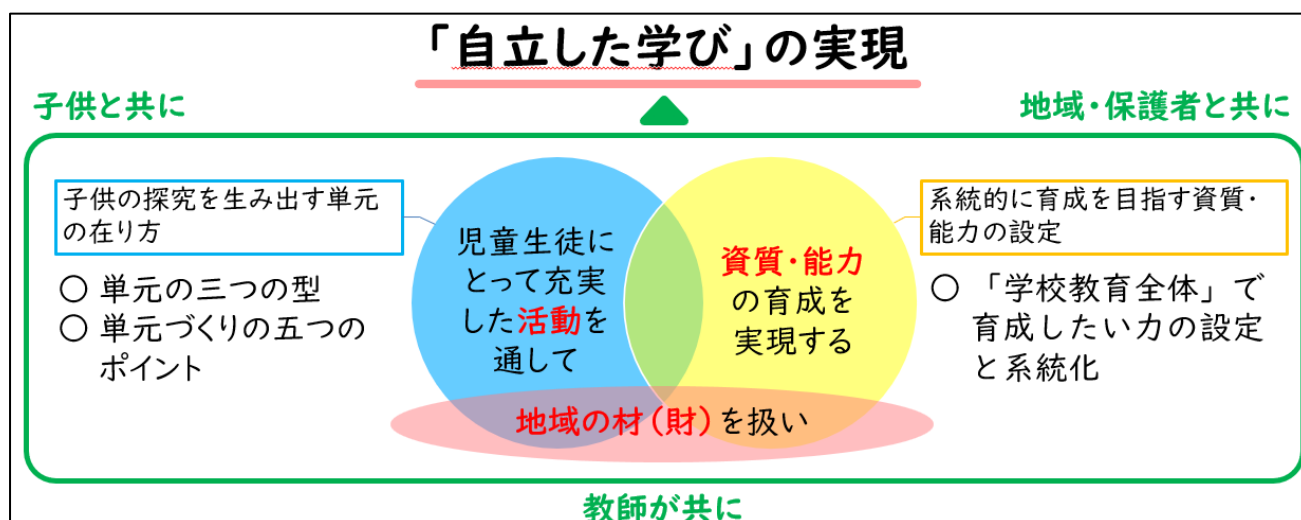
1. 取組のポイントと経緯

～「ルール」を敷かない勇気をもつ～

これまでの学校文化には、大人が子供に「答え」を授けるような慣習が根強く残っていました。そのことが、子供たちから自立のために学ぶ機会を奪ってきたのかもしれない。

これまで吉名学園では、生活科及び総合的な学習の時間を中心に研究を進めてきました。その過程で、指導法だけでなく、学びの在り方やそれを支える学校の在り方についても考えてきました。その到達点が「自立した学び」を子供たちに」という学校教育目標にも掲げている本校の理念です。

本校の研究をまとめると次の図のようになります。



「自立した学び」の実現に向けて、地域の「材」を扱いながら進めてきた本校の研究には二つの要素が含まれています。一つ目は、児童生徒にとって充実した活動という要素、二つ目が、資質・能力の育成の実現という要素です。そのどちらの要素も「共創」の考え方が含まれています。

「自立した学び」を生み出す「探究×共創」の考え方

学校の中だけで完結する「探究」には、限界があります。子供たちが自分の思いや願いを起点に探究を進めていくためには、子供自身による単元づくりへの参画、多様な他者との協働が不可欠です。思いや願いの実現には、敷かれたレールを進むのではなく、自ら道を切り拓いていく、そのようなレールを敷かない探究の基盤にあるのが「探究×共創」の考え方です。



共創の主体となるのは「子供」「教職員」「地域・保護者」の三つです。子供と共に、教職員が共に、そして地域・保護者と共に探究を進め、「自立した学び」の実現を目指すということです。吉名学園では、単に互いに関わり合うことにとどまらず、一緒になって学びを創り上げていくことを「共創」と捉えています。

1. 子供との共創

子供たちの思いや願いを起点に、探究が始まります。教師と子供との対話、子供同士の対話を通して思いや願いが醸成され、探究の過程で生まれた「問い」が、次の学びを創り出していきます。教師が一方向的に単元を設計するのではなく、子供自身が単元づくりに参画し、子供と共にカリキュラムを創り上げています。

2. 教職員同士の共創

「自立した学び」の実現に向けて、子供の学びの姿を基に対話を重ね、それぞれの視点を持ち寄りながら、学びを創っていきます。互いの授業に学び、支え合いながら、学校全体でカリキュラムを創り上げています。

3. 地域・保護者との共創

自分たちの町の課題に対して、子供と地域・保護者が協働しながら解決を図っていきます。地域・保護者の願いや知恵が、子供たちの探究をより切実で、豊かなものにしていきます。こうして、地域・保護者と共にカリキュラムを創り上げています。

この三つの「共創」が重なり合うことで、子供たちの思いや願いを起点とした探究は、学校の枠を越え、実社会とつながっていきます。

2. 授業づくりのポイント:カリキュラム・デザイン

～実践の積み重ねから導き出した「単元の三つの型」と「単元づくりの五つのポイント」～

本校では、生活科及び総合的な学習の時間を中心に、研究授業を往還しながら実践を積み重ねてきました。その過程で、各単元構想や授業実践を振り返り、共通点や違いを整理しながら検討を重ねることで、子供の探究を生み出す単元の在り方を見出してきました。

(1)「単元の三つの型」



夢実現型

個人や学級の思いや願いの実現を図る。



提言型

学校や地域の課題に対して、個人や学級で考えた解決策を提言する。



貢献型

学校や地域の課題解決に向けて行動する。

本校が見出した「単元の三つの型」の、いずれにおいても共通しているのは、子供たちが地域の「材」に触れる体験の中から生まれた「やってみたい」「なんとかしなければ」という思いや願いを出発点に単元を構想している点です。

(2)「単元づくりの五つのポイント」



思いや願いに基づく挑戦

児童生徒の思いや願いを基にプロジェクトを立ち上げる。思いや願いに沿って思い切った活動・挑戦ができるように、教師の支援は必要最小限とする。



高い壁との出会い

活動を進めていく過程で出会う高い壁(失敗・困難)を取り除かず、意図的に出合わせ、解決に向けて試行錯誤する場を設ける。



再挑戦の場の設定

失敗を失敗のまま終わらせるのではなく、再挑戦の場を与えることで、困難や苦勞を乗り越えた先に得られる達成感・満足感を味わわせ、自信をもたせる。



巻き込む活動

実生活・実社会の課題を解決するには、大人との協働が不可欠である。子供主導の活動に大人や地域を巻き込むことで、より「本物」の探究に近づく。



「本物」からの学び

実際に取り組んでいる人、一流の人から学ぶことで、学びを充実させることができるとともに、その方の生き方に触れることで、児童生徒がよりよい生き方を考えることにつながる。

本校では、子供の課題に対する熱量を高めるとともに、資質・能力の育成を充実させるために、五つのポイントを教職員共通の視点として設定しています。特徴的なのは、単元の中で「高い壁

3. 実際の授業のワンシーン

～年度が変わっても、変わらない「探究の軸」～

実態や社会状況に即した実践の更新

過年度踏襲型の実践では、子供たちの本気は生まれません。吉名学園では、目の前の子供の実態や社会の状況、そして何よりも、子供たちの「やってみたい」「なんとかしなければ」という思いや願いに応じて、単元のテーマや展開を毎年ゼロベースから創り出しています。ここでは、「共創」を主軸として展開された二つの実践を紹介します。

【実践事例①: 令和7年度 第2学年】

自分たちの町ならではの「すてき」を考え、伝え合い、深まる地域への愛着
～町のすてきをつたえよう！～

＜思いや願いの芽生え＞「興味・関心や思いに応じた町探検」

2年生に自分たちの町について知っていることを尋ねると、海や山、駅や公民館などの公共施設、小規模の商店など様々な場所があることは知っていても、「あまり行ったことはない」「よく知らない」という声が上がりました。そこから、それらの場所に「行ってみたい！」「詳しく知りたい！」という思いが生まれ、単元が立ち上がりました。

＜本物からの学び＞「地域の人や場所との関わり」

児童は町探検を通して地域の人や場所に繰り返し関わる中で、新たな問いを発見していきました。また、そこで働く人や利用者にインタビューしたり、地域の人と一緒に活動したりするなど、地域の人や場所に実際に関わる機会を多くもつことで、より地域に対して、親しみや愛着をもつようになりました。



＜高い壁＞「先生方からの予想外の反応」

その後、自分たちが見つけた町の「すてき」を伝えたいという声上がり、それを自分たちでまとめて先生方に発表しました。しかし、「もっと自分たちの町ってすごいな、自分たちの町はいいなと思える発表になるといいのだけれど……」という感想をもらいました。このとき児童は、自分たちの発表を客観的に捉えて、自分たちがその場所ならではのよさやその場所に関わる人に着目できていないことに気がきました。



＜再挑戦＞「自分たちの町ならではの「すてき」を模索」

聞く人に「自分たちの町はやっぱりいいな」と思ってほしいという目的を再確認し、自分の伝えたい町の「すてき」を、他の場所と比較したり自分の生活と関連付けたりしながら、再度捉え直しました。すると、「自然がいっぱいある」「そこで働く人は町の人のために昔からがんばっている」「その場所で活動しているお年寄りの人があたたかい」など、その場所ならではのよさに気付くことができました。



＜成果と変容＞「深まる地域への愛着」

町探検でお世話になった地域の人や保護者に、町の「すてき」を伝えました。「この町に住んでいたのに知らなかった」「よいところを見つけてくれて嬉しい」などの感想をもらい、より一層地域への愛着を深めていました。また、単元が進むにつれて、児童から「下校中におばあさんが話しかけてくれて嬉しかったよ」「お母さんもあのお店は安くていいって言っていたよ」などの発言が出るようになり、地域の人や場所と自分の生活との関わりに目を向けることができていました。



【実践事例②：令和7年度 第9学年】

中学生が本気で挑み、社会に届けた「ふるさと納税返礼品の企画・開発」への挑戦
～吉名の町の魅力を日本全国に届けよう！～

＜思いや願いの芽生え＞「将来につながる学びを、自分たちの手で」

9年生は、これまでの「YOSHINA 未来学」で身に付けてきた資質・能力を振り返ると共に、吉名の魅力を知ってもらうために今年度取り組みたいことについて話し合いました。吉名町を盛り上げたい、たくさんの方に吉名町の魅力を伝えたいという思いから、「イベントの企画」や「SNSによる情報発信」といった案が出されましたが、見通しが立たず、「何から始めればよいのか分からない」と次の一歩を踏み出せずにいました。

＜転機となる出会い＞「税金とふるさと納税から広がった新たな視点」

ある日、生徒たちは竹原観光まちづくり機構の方から、税金やふるさと納税の仕組みについて学ぶ機会を得ました。「ふるさと納税は町の魅力を全国に届ける仕組みでもある」という話に触れたことで、「自分たちも吉名町の返礼品を企画してみたい」という思いが生まれ、単元が立ち上がりました。



＜過去の経験からの学び＞「選ばれる返礼品とは何か」

生徒たちは、改めて吉名町の魅力とは何かを問い直し、地域との関わりを手がかりに返礼品の可能性を探りました。併せて、ふるさと納税のサイトを分析し、人気の返礼品の共通点や寄附者の傾向について調べました。さらに、マーケティングについて学ぶ中で、「誰に届けたいのか」

を明確にすることが重要だと理解し、話し合いを重ねた結果、かつて日本一の高値で取り引きされた「吉名のじゃがいも」に着目し、二つのグループに分かれて返礼品の企画・開発に取り組むことになりました。

<高い壁、そして成果と変容> 「社会に届いた実感」

吉名で栽培されたじゃがいもを出品しようと思ったグループは、返礼品として出品できる量を確保するために農家の方や JA に相談を重ねましたが、思うように進まず壁に直面しました。そのような中、「吉名じゃがいもプロジェクト」の方と出会い、その方々と協働しながらじゃがいもの植え付けから収穫までを行い、そのストーリーを PRしながら、自分たちで育てたじゃがいもを返礼品として出品する道を切り拓いていきました。



実際のサイトはこちらから！



一方、新商品を開発しようと思ったグループは、じゃがいもと瀬戸内レモンを合わせた「レモじゃが炒め」の完成に向けて、学校運営協議会委員や地域の事業所の料理長から助言を受けながら試作と改善を重ね、行政機関とも連携しながら販売に向けた準備を進めました。



実際のサイトはこちらから！



二つのグループはそれぞれに高い壁と向き合いながらも、多くの事業所の方々と協働し、返礼品の企画・開発を実現しました。完成した返礼品は生徒たち自身の手で箱詰めされ、直筆のお礼状を添えて全国へ発送されました。自分たちが考え、育て、つくり、詰めたものが社会に届く。その実感は、生徒たちに大きな達成感と喜びをもたらしていました。単元を終えた生徒たちは、「地域の方には感謝の気持ちでいっぱいです」「様々な事業所の方の協力があってプロジェクトを達成することができた」と、地域に対する見方を変えながら、今後の生き方に身に付いた資質・能力を生かそうとする姿勢が見られました。

4. 先生方の声・インタビュー

～「探究×共創」で変わる子供と教師の姿～

——「探究×共創」の取組を通して、子供たちにどのような手応えを感じていますか。

日下 教諭(研究推進リーダー):

本校に勤務して1年目、初めての総合的な学習の時間の授業を見た同僚の先生から「日下先生、ルールを敷きすぎじゃないか。」と言われたことが、私のスタートでした。子供たちの「自立した学び」を実現するために、教師として何ができるのかを問い直し、試行錯誤を重ねる中で見えてきた一つの答えが「探究×共創」です。この取組を通して、特に手応えとして感じているのが、

- ・ 子供たちの目の色が変ること
 - ・ よい意味で子供たちに振り回されるようになること
 - ・ 地域を見る目や将来を思い描くビジョンが豊かになること
- の3点です。

正直、子供に活動を委ねることには不安もありました。限られた時数の中で、何らかの成果物を形にしなければならないという教員側の焦りもあります。しかし、あえて手を出さずに見守ってみると、子供たちは自分たちで立ち止まり、話し合い、次に何をすべきかを考え始めます。そのときの真剣な表情や、大人には思い付かないような発想から、学びが前に進むこともありました。

その経験を重ねる中で、教師の役割は「ルールを敷くこと」ではなく、「子供たちの学びをつなぐこと」ではないかと捉えるようになりました。子供の問いに応じて、学校運営協議会や竹原観光まちづくり機構など、本物の人や仕事と出合わせることを意識しながら、単元をデザインしてきました。

その結果、活動をやり遂げた後の子供たちは、大きな達成感を味わうとともに、地域の方々への感謝の気持ちや「地域をよりよくしたい」という思いを強くしていきます。また、その経験を将来やキャリア形成につなげて考えようとする姿も見られるようになりました。先日、竹原市の教育長様に、ふるさと納税のプロジェクトに関する活動報告を行った際、「この活動を通して身に付いた力や、学んだことは何ですか」という質問をされ、それに対して生徒が次のように答えていました。

「プロジェクトの実現について不安を感じることもありました。でも、竹原観光まちづくり機構や吉名じゃがいもプロジェクトの方と協力する中で地域との関わりが生まれ、自分たちが「やりたい」と思った取組を成功させるんだという強い思いをもって、物事に取り組む力が身に付いたと思います。」この言葉から、「探究×共創」により子供たちに学びの主権が渡り、自立的に探究を進めてきたことを実感しました。

さらに、「探究×共創」は、子供たちだけでなく、教職員同士の関係性にも変化をもたらしています。ウェビングや、研究協議を通して子供の姿を軸に語り合う中で、学年や教科を越えて学びを創る文化が、学校全体に少しずつ根付き始めていると感じています。教職員自身が伴走者として学

びを面白がり、子供を信じて「待つ」風土が醸成されてきていることも、大きな成果の一つだと捉えています。

——学校全体で取り組む意義について教えてください。

伊場田 校長：

本校が目指すものは、学校教育目標でもある「自立した学び」の実現です。この「自立した学び」には、誰かに頼るのではなく、自ら課題を見付け、考え、多様な他者と協働して未来を創るという意味を込めています。

過疎化や高齢化等の課題を抱える地域だからこそ、子供たちには、予測可能な社会の中で、臆することなく挑戦する気持ちを持ち続けてほしい。そのためには、学校の中だけで完結する学びでは不十分です。そのために、まず、教職員が「殻」を破り、地域や関係機関を巻き込むことで学校の学びは社会とこれまで以上に繋がりました。この繋がりを大切に「探求×共創」のサイクルを9年間回し続けることで、「自分たちの力で地域を変えていくことができる」という自己有用感を持ち、将来、ふるさと「吉名」を想い、さまざまな形で貢献できる人材になると確信しています。

5. 終わりに

吉名学園の挑戦は、「子供たちがゴールやルートを創る教育へと転換すること」へ一歩踏み出すことから始まりました。「子供を信じて任せること」「地域と共に学びを創ること」は、特別な条件がなければできない取組ではありません。生活科や総合的な学習の時間という、どの学校にもある学びの場に、視点をもって向き合うことで実現できる学びだと考えています。

本校の実践の中で印象的だったのは、課題に向かう子供たちの「目」の変化でした。「自分たちがこの町を変える」「自分たちの学びが社会とつながっている」。そうした当事者意識をもって学ぶ姿は、頼もしく、そして眩しいものでした。

「自立した学び」の実現は、教師にとっても一つの「高い壁」です。しかし、その壁の前で子供と共に考え、試行錯誤する中で、教師自身の学びもまた深まっていきます。子供が問いをもち、教師が伴走し、地域と共に学びを創る。その先には、教師と子供が共に成長し、ワクワクしながら学び続けられる新しい学校の風景が広がっているはずです。

本報告が、各校における生活科・総合的な学習の時間の充実や、新たな挑戦への一歩となれば幸いです。